
かんきん！

雨英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かんきん！

【Nコード】

N5684S

【作者名】

雨英

【あらすじ】

非日常を舞台とした日常物です。

主人公は、とある事情からネットで知り合った仲間と共に誘拐事件を起こす。

犯罪に手を染めたことにより、まったく冷静でいられない彼に反し、誘拐された少女達は事態を楽観的に捉えていた

プロローグ

そう。これはきつと間違っている。

何が正しくて、何が間違いなのか。

何が道徳的で、何が非道徳的なのか。

何が倫理に沿ってるのか、何が倫理に反するのか。

そもそも、道徳、倫理とは何なのか。

突き詰めて行けばきりがなが、少なくともいくら自問自答しても答えなど出なかった問。

しかし、これは絶対に間違いであり、非道徳的であり、倫理に反していると100人中100人が思うのだろう。

俺だって、好きでやっているんじゃない。れっきとした理由だつてある。しかしそれもあくまで建前、自分への言い訳なのかもしれない。

自分の中で何度も葛藤があった。眠れない日々が続いた。今朝だって精神安定剤を一握り飲んだ。

それでも、もうここまで来たんだ。

後戻りは出来ない。

そう自分へ言い聞かせ、くぐもった声が聞こえる中、左手のメモを頼りに、携帯電話を押した。

プロローグ（後書き）

処女作です。

ということでも試験も兼ねて短いです。

というかプロローグは短くなりそうです。

うん・・・いろいろと緊張。

でもまあ頑張ってるのんびり続けていきたいと思ってます^^

プロローグ(2)

俺はハンドルを片手に煙草を吹かしていた。肺の奥まで吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

それでもまったく気分は落ち着かなかった。

さつきから彼の足はエンジンと共に車を揺らしている。

そしてもう一つ要因があった。

猿轡さるこしらに目隠し、それき手首足首をガムテープでぐるぐる巻きにされ、横たわった少女たちが、大きく身体をよじっている。

うわっ・・・パンツ見えてない？

バックミラー越しに少し覗いてみた。

普段出会うとの無い光景に、ああ、ついに自分はとうとう戻れないところまで来てしまったんだなと思う。

ここまで来るのはそう難しくなかった。目的の姉妹に加え、その友人までいたのは少々予定外だったが、所詮女子中学生の腕力だ。

一人分の差はカバー出来からだ。

一瞬。わずか30秒の出来事だった。

計画の段階があつたとはいえ、その30秒でついに俺の人生は狂ってしまったのだ。

自分も十分悲惨だとは思うが、少女達なんて、まったく関係ないのに俺のいざこざに巻き込まれてたまったもんじゃないだろう。少しは労わってあげてもいいんじゃないかと思つた矢先、後部座席にいる仲間が「黙ってるゴラァ！」と言い、それ以来彼女達からは鼻を嚙る音しか聞こえなくなった。

空気が張り詰めているなんてもんじゃない。空気がないように感じた。

いくら吸つても肺に酸素は送られない。煙草の煙だけが肺を埋め尽くすようだった。

早くこの車から降りたいとは思つたが、捕まってしまうては話に

ならないので、法定速度ギリギリで俺は車を南へと向かわせた。

はだけたスカートからはみ出る生足に伝わったコンクリートの冷たさは、まるでこの現状を映し出しているようだった。手も足も、視界までもが塞がれ、聴覚だけを頼りに思考を凝らす。どこからともなく汽笛の音がするということは、海の近く。そして地面が揺れていないとなると港の倉庫なのだろうか？ 静寂の中機械的に鳴り響く汽笛の音がしばらく続いた。

「やあやあみなさん、気分はどうだい？」

その静寂をぶち壊すような冷酷な声が聞こえた。

それと共に猿轡と目隠しが取られ、声の主が明らかになる。ひよろつとして細長い、肌も白くて、頬も痩せこけている。栄養が足りてないような身体だが、目だけは活力に満ちている。

しかし表情は笑っているのだが、その目はまったく笑っていない。

「ふんっ！ 最っ高の気分ですが！？」

隣でお姉ちゃんが吐き捨てるように答える。

「ふふっ・・・そうですか、それは何よりです」

依然として彼は表情を変えず、身体をとどころ破けたソファへ預けた。

「さて、ここまで来て自分の置かれてる状況が分かんないなんてことはないだろうけど、一応説明しておくね」

そして彼からは表面上の微笑をすら無くなり、生気がない無表情でこう告げた。

「君たちは3億円相当の大切な商品だ。今から君たちのお父様の会社、『KATABIRA』に買って頂く」

だいぶ血の気も治まってきた。

というか、人間というのは不思議なもので、どれだけ理不尽な状況下でもだんだんと事態を冷静に客観的に見れるようになってきたのだ。

始めは身体も目的なのかと思ったがそんなようすも無く、ただ時間だけが過ぎていった。

このまま待てばいい。

そうすればパパが助けてくれる。

だから私はただ我慢すればいいのだ。

パイプイスに肘から縛られ、窮屈なのは否めないが無理な体勢ではない。エコノミー症候群という言葉が頭をよぎるが、まあどうにかなるだろう。

たった2日。

48時間なんてあっという間だ。

後には一つの自慢話となるだろう。

友達に、あの時はどうなるんだろうってとっても怖かったけどお、今ではいい体験だったよお、と笑って話せる日が来るはずだ。

そんな風に事態を楽観視している最中、突如猿轡が取られた。

「きゃっ！！」

事態は大したことない、そんな淡い思い込みを裏切る一言が告げられた。

「なあ？俺とゲームをしないか？」

「ここか？ここなのか？」

俺は指で探りながら尋ねる。

「あつ……………いやっ！だ、だめええええ！…そこはだめなのおおお
お！！！！」春美は必死の形相で訴えるが、そんなこと知ったこつ
ちやない。

「ほづ……………ここか」

そう言いながら指で弾く。

「お願いっ！！そこはやめてっ！！！」

あらあら、涙目になってるよ。

「言つたる？これはゲームだ。ゲームには当然ルールがある」

「お願いいい！！何でも言うこと聞くからあああ！！！」

その条件は魅力的だったがまあいい。

「ルールには従わないとなあ」

そう言つて俺は春美の大切なものへと二本の指を突き出しながら再び手を伸ばした。

「はぁ……春美、ババ抜きくらいもう少し静かに出来ないのか？」

早々に抜けた泉美は妹に落胆したため息をつく。

「だつてえ………」

春美はわざとらしく人差し指を合わせる。

「これでもう7連敗か」

俺はもう一度揃ったジャックに笑みを浮かべテーブルへと放った。

「何でわたしってこんなに弱いのかな……」

これまたわざとらしく頬を膨らませ愚痴を溢す。

「なんで……って、そりゃあれだけ表情どころか口にまで出してたら誰だって分かるんじゃない……」

朧がカードを束ねながら答える。

「しかし時に誘拐犯よ」

「ん、なんだ？ 泉美」

「今更ながらの質問で悪いのだが……」

「ああ」

「何故、ババ抜きなのだ？」

その間に朧も頷く。

「なぜって……そりゃ、誘拐に港の倉庫となればトランプと言うのが必然じゃないか？」

「いや……火サスや金9ではたまに観るし、そうかも知れぬが、それは普通仲間内であるものであろう？ 誘拐犯とその被害者が仲睦まじくするものではないか？」

まあ、確かにそうかもな。

「そ、それに私が言うのも変な感じがするが……その……私たち現役の中学生だぞ。しかも、ルックスも悪くない。そんな少女たちを3人も縛り付け、こんな密室にいるなんて……その……え、えっちな悪戯をしたくなったりはしないのか？」

と、泉美が頬を紅く染め、身をよじらせ、腕で胸の辺りを隠すように聞く。

「ああ、その点なら心配ないぞ。俺、別におまえらの身体に興味無いし」

「なっ!!……」

泉美は目を見開く。

「もしかして……おまえ……痴女？」

社長令嬢にそんな趣味があったとは……。

「違うわい!!」

泉美は顔を真っ赤に染め立ち上がろうとする。

しかし、イスに縛られてるのでつんのめったようになってしまう。

「ただ、私はこれほどの状況下になっても魅力を感じさせない女なのかと思ってな……」

どちらにせよ困った子のようだ。

「俺、年上にしか興味無いし」

「「「……………」」」

みんなの視線が痛いよお！

「ま、まあ俺じゃなくて、他の仲間だったら今頃、三人揃って毒牙にかけられてただろうな」

きっと俺も誘拐したのが年上のお姉さんだったら……………」ごくり。

「まったく運が良かったな、おまえたち」

「誘拐された時点でこの上ないくらい不幸だと思うのですが……………」

菜はカードを束ね終わったらしく、次のゲームに備えシャッフルしている。しかもご丁寧にリフルときており、綺麗に交互になっている。ディーラーにでもなれるんじゃないか？

「はいはい。わたしからもしつつも〜ん」

「なんだい春美君」

「紐で固く縛ってるとは言っても三人とも手足が自由ってのは危険じゃないの？」

そう。ここに連れてきた時は、目隠しに猿轡、両手両足を縛る完全な拘束だったが、今やパイプイスに腰から縛るだけとなっている。しかも多少頑張れば紐もほどけそうな無防備さだ。

「まあおまえらは逃げないって信じてるし」

「何を根拠にだ……」

それに、

「最悪の場合これがあるし」

そう言っつて俺はポケットから拳銃を取り出して机に放る。

「わあ〜すご〜い。重いし、本物みたいだね〜」

春美はそれを取っつて、まじまじと眺める。

「……あつ……」

何やってんだー俺！ー俺！ー一丁しか持っつてないぞ！ー！

なんて俺は馬鹿なんだろうか。終わっつた……俺の完全犯罪（予定）はこんなにもあっつけなく幕を閉じつた。それどころか人生という大舞台も閉じようとしてる。母さん……やっぱり俺、犯罪は向いてないみたいだよ……。もし、出所出来たら、精一杯真面目に頑張るよ。

「やっぱわたしにはこんな物騒なもの持っつてられないよ〜。はい、誘拐犯さん」

「へっ？あ、ども……」

そう言っつて春美は拳銃を俺に返してきた。

もっと馬鹿な人いたー！ー！！！！！！

「な、何やってるのよ春美！今完全な勝機だったでしょうが！」

「春美ちゃんのバカ……………」

泉美は再び立ち上がろうとしてつんのめり、栞は大きくため息をついた。

母さん……………俺……………もう一度頑張ってみるよ……………悪い方に。

そう再び犯罪に手を染めることに誓い、ポケットへ拳銃を入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5684s/>

かんきん！

2011年10月9日00時20分発行